

## イカロスの素焼き片から見えてきた戦前の世相

今春、解体修理を完了した東塔の落慶法要が執りおこなわれた薬師寺。その発掘調査で出土した小さな素焼きの破片をご紹介しましょう。

表面には、ギリシャ神話で知られる翼をつけたイカロスが空を飛翔する姿を表現しています。復元すると約17センチの円形のプレートで、表面下部や裏面には文字が確認できますが、当初はいったい何なのかよくわからぬままでした。インターネット上に掲載されていた第1回全日本帆走飛行競技大会の金属製メダル(3)をきっかけに、この素焼き片は、地元の赤膚焼の窯元で制作された昭和13年(1938)開催の同大会、つまり戦前のグライダー大会の参加章であることが判明します。裏面には開催年「皇紀二五九八」や主催者名「帝國(国)飛行協会/日本帆走飛行聯(連)盟」、制作社名「生駒製」の文字が刻まれていました。

全日本帆走飛行競技大会は昭和12年から14年(15年は戦況の悪化のため中止)に開催されたものです。東大阪市にあった盾津飛行場で開会式をおこなった後、いったんばらした機体を生駒山山頂に運び上げ、再度組み上げると、山頂からゴム索によって離陸、6.4km西方の盾津飛行場を目指しました。ただ、到着までの速さを競ったのではありません。動力のないグライダーでうまく気流をつかみ、滞空高度や滞空時間などを競ったのです。



(裏)



1 陶製プレート（第2回全日本帆走飛行競技大会） S=1/2

現代からは想像できないかもしれません、昭和10年前半代という時代にはグライダーが日本で大変人気を集めました。大学や高等学校、日本各地でグライダークラブが多く設置され、青少年の航空スポーツとして普及が図られていたためです。昭和10年(1935)にはグライダー王とも称されたドイツ人ウォルト・ヒルトがグライダー指導のため日本に招請され、全国を巡回して盛大歓迎を受けました。ヒルトの盾津飛行場での模範飛行では3万人もの観客が集まつたといいますから、その注目度の高さに驚きます。

そして、金属製メダルを大切に保管していたのは、機体の整理などの補助として第1回全日本帆走飛行競技大会に参加していた一人の女学生でした。今回、関連の新聞記事が見つかり、彼女が高等女学校卒業後には滑空士(グライダー乗り)、さらには飛行家を目指したいとのコメントが発見されました。しかし、彼女が参加した第1回大会の2か月後には盧溝橋事件を契機に日中戦争が始まり、日本は長い戦争の時代に踏み入っていきます。それにともない、国をあげて戦争への協力体制が敷かれていきます。

今回、この素焼き片の調査のなかで判明した制作業者、赤膚焼陶工二代松田正柏は、自身が掲載された新聞記事を収集したスクラップブックを制作していたこともわかりました。それにより、開戦を受け金属を節約するための非常時参加章として陶製に置き換えたとの制作背景があきらかになったのです。

戦争が激化すると、スポーツとしてグライダーを楽しんだり女性がそれに関わったりする余裕は社会から失われていきます。そして、かの女学生も飛行家になる夢を持ち続けることは叶わず、二代正柏も抱えていた多くの工人を失い、戦争によってその後の人生が大きく変わってしまいました。



2 1の復元合成写真 S=1/3



3 金属製メダル  
第1回全日本帆走飛行競技大会  
(伊達のり子氏寄贈)

S=1/1

素焼き片は86年前に制作されたものでしたが、すでに生駒山でのグライダー大会や、薬師寺門前にあった松田正柏窯の記憶や記録も時の流れに薄らいでいっています。

考古学というととかく古い時代の研究のイメージが強いものですが、近代の出土資料から、失われつつある記憶や記録を掘り起こすことでも調査・研究として可能であるという一例として、興味を持っていただけると幸いです。

(企画調整部 岩戸 晶子)

平城宮跡資料館夏期企画展『イカロスの翼—薬師寺の発掘成果から見る近世と近代—』では本資料を展示中。10月1日まで。